文献史料に見る南東アラビア 2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1589

文献史料に見る南東アラビア（2）
ササン朝支配期～イスラーム征服期

蔀　勇造

Ⅰ．はじめに

前稿［蔀 1998-2］の冒頭にも記したように、筆者は金沢大学文学部の佐々木達夫教授と協力して、「イスラーム勃興期前後のペルシア湾と紅海」というテーマで共同研究を始めた。ペルシア湾と紅海の港湾都市遺跡で、発掘を含む考古学調査を実施して、その結果を比較し、さらに当時の事情を伝える文献史料と併せて検討する計画であった。ところが、調査を予定していたエリトリアと隣国エチオピアの間に予期せぬ国境紛争が勃発し、紅海沿岸での調査計画は頓挫してしまった。その後現在に至るまで事態は好転せず、膠着状態が続いているため、残念ながら上記の共同研究も目下ペンディングの状況に置かれている。

それはともかく、前稿の続編としての内容を持つ以下の小論は、共同研究の筆者の分担部分の成果の一部で、前稿に続く時代、すなわちササン朝支配期からイスラーム征服期へかけての南東アラビア（現在のアラブ首長国連邦とオマーン。近代以前を対象とする記述の中では「オマーン」と総称されることが多い。本稿でもしばしばその意味でこの語を使っている）関連の記事を文献史料の中に求めた。ただこの問題に関しては、この地域を専門とするウィルキンソン J.C.Wilkinson が既に多くの論考を発表しているので、詳細はそちらに譲る。本稿では、ウィルキンソンの諸研究も参照しつつ、この時期の南東アラビアの歴史の要点を記す一方で、筆者にとって関心のあるいくつかの問題をやや詳しく検討するに止めたい。

なおこの研究は、財団法人鹿島学術振興財団の助成金を受けて行われた。

Ⅱ．前稿への補遺

本題のササン朝期に入る前に、前稿脱稿後に入手した文献も参照しつつ遺漏を補うとともに、新しい論点を提示したい。

Ⅱ.1.　ムーキーという地名

シャルジャ首長国（U.A.E.）のムレイハの遺跡から出土したアラム語碑文の点刻された銅板は、四隅にあけられた孔と文面から見て、墓のおそらく壁に打ち付けられていた墓誌であった[Teixidor 1992]。書体や文法の特徴をもとに２世紀のものと推定されている[*Ibidem*:703]。その２行目に、墓が造られた場所としてムーキー MWKY という地名が記されているのが注目に値する。

シュメールから古バビロニア時代までの文書の中でマガンとかマッカンと呼ばれていた地方が、アケメネス朝時代の古ペルシア語ではマカーと表記されているということを前稿に記したが[蔀 1998-2:21]、この語が２世紀のアラム語ではムーキーと発音されていた訳である。もっとも前５世紀のヘロドトスが、おそらくマカー地方の住民と思われるミュコイ Mykoi という族名を伝えている［『歴史』 3.93;7.68］のを見ると、既にアケメネス朝の時代から西方ではこの発音が通用していたのかもしれない。

Ⅱ．2．　アズド族のオマーン移住

伝説ではイエメンからオマーンへのアズド族移住者の第１陣は、マーリク Mâlik b. Fahm に率いられ

てハドラマウト経由で移住した人々だと言われている。その当時のオマーンを支配していたとされるペルシア王ダーラーを、ポッツがアケメネス朝最後の王ダリウス３世に比定し、アズド族のオマーン移住が前４世紀より始まったと主張するのはアナクロニズムで、一般には彼らの移住が始まったのは１世紀か２世紀前半と考えられていると記した［蔀 1998-2:23-24]。

この点に関して若干説明を補うと、伝承 [Ross 1874:113] にはアズド族の2000騎にも上る騎馬隊が登場するが、そもそもアズド族の原住地とされるイエメンに乗用の馬が導入されるのは１世紀以降のことで、それも数はそう多くない。前４世紀においては勿論のこと、１～２世紀においてもアズド族の移住民がそれだけの数の馬を伴っていたとは考えられない。また伝承 [*Ibidem* :114] ではペルシア軍はスハールから出陣したことになっているが、これも前稿で記したように[蔀 1998-2:29]、スハールで発掘を行った考古学者ケルヴランによると[Kervran & Hiebert 1991]、この港市の基礎が据えられたのは前１世紀であるという。彼女は後にこの年代をさらに若干下げて"probably during the first century A.D. if not a little earlier"と述べるに至っているので[Kervran 1996:40]、いよいよこの伝説の時代的背景が紀元後のそれである可能性が高まった。

この移住アズド族との関係を示唆されているのが、オマーンの後期鉄器文化、別名サマド Samad 文化(名称の由来は代表的遺跡の地名)である。年代的には、近年は当初考えられていたよりも新しく、前100年頃から893年という説が提唱されていて[Yule 1993:148-151]、アズド族の移住年代の通説とそれほど隔たってはいない。しかし伝説ではオマーンにおけるアズド族の最初の根拠地となったカルハト近辺からは、この文化に属する遺跡が発見されないことや、アズド族の原住地とされるイエメンの遺跡からの出土品との間に共通性が認められないことが指摘されていて[Yule & Kervran 1993:95]、アズド族の移住伝説とサマド文化を安易に結び付けることは出来ない。このケースに限らず、一般に文化の変化の要因を外来民族の移住・流入による住民交替に求める説 population replacement theory への批判も行われている[Potts 1998-1:34-35]。

Ⅱ. 3. 南西アラビアへの馬の導入

本稿の主題からはかなり逸脱することになってしまうが、上記の事実との関連で、アラビア半島への馬の導入の時期の問題について、ここで近年の発掘調査の成果も交えて簡単にまとめておきたい。

ストラボンは『地誌』第16巻４章２節において前３世紀のエラトステネスを引いて、現在のイエメンに当たる「幸福のアラビア」には「馬、ラバ、豚はいない」と記している。では彼自身の時代にはどうであったかというと、前25/24年にこの地に遠征した友人のエジプト総督アエリウス・ガルスがもたらした情報の中に、当地の馬に関するものはない。同上章の第24節に地元民の軍勢への言及があるが、そこでも騎兵の存在を示唆する記事はない。他方、同じ章の第26節では半島北西部にいたナバタイ族の家畜に言及して「羊は毛並みが白く牛は大型だが、この地方では馬を産しない。そしてラクダが馬の代りの役をする」と記している。この地方に関するストラボンの知識の多くは、首都のペトラに在住していたことのある知人で哲学者のアテノドロスから得られたというのが、一般の理解である。要するにストラボンを読む限り、紀元前後の時代には、現在のヨルダンからイエメンへかけての地域の広義のアラブ人の間では、馬はまだ家畜として使用されていなかったようである。

ところがその約半世紀後、１世紀中頃に著された『エリュトラー海案内記』［蔀 1997］からは、これとは異なる状況が窺える。この書の第24節には、現在のイエメンのモカ港あたりに比定されるムーザという商業地における交易品が列挙されている。それを見ると、この地方を支配していたサバとヒムヤルの王や首長への献上品の筆頭に、馬と駄役用のラバが挙げられているのが目をひく。 さらにその先の第28節には、ハドラマウト王国のカネーという港における交易品が列挙されているが、ここでも王への献

上品の中に馬が含まれている。上記の『地誌』の記事と『案内記』のこれらの記事とを読み合わせると、南西アラビアの諸王国には1世紀半ば頃ようやく、エジプトから来航した商人の手を通じて馬が移入されつつあったことが窺える。但しこの段階では、馬は通常の交易品とは区別された支配者への献上品として記載されていて、未だ貴重な品であったことが推察される。因みに、『案内記』の中で馬に関する記事はこの2箇所だけである。

一方、この地方に残されている碑文史料からも、上記の事実の裏付けが得られる。古代南アラビア語でも馬は *frs* (pl. *'frs*) と呼ばれたが、この語はまた文脈によっては「騎馬兵」をも意味した。管見の及ぶ範囲でこの語の初出例は、いずれも100年前後の作と思われる Ja 643+643bis と Ja 644 の2碑文に見出せる。前者はサバ王 *Krb 'l/Byn*、後者はその弟 *Yhqm* の、それぞれ臣下が残した戦争の記録である。Ja 643の24行目にはサバ王麾下の軍勢の中の騎馬隊が、また Ja 643bis の2行目と Ja 644 の20行目には、それぞれ敵軍から奪った戦利品として馬がラクダやロバとともに言及されている。戦いの相手は前者ではハドラマウト軍、後者ではシャダド族というサバの南にいた部族である。これらの記事から、『案内記』以降の半世紀間に南西アラビアでも馬が相当に普及し、軍勢の中で騎馬兵が既に一定の役割を果たすようになっていたことが推察出来よう。

増えた馬の一部は、エジプトからもたらされた馬をもとに現地で再生産されたものであろうが、それだけでは短期間に各地に普及した理由は説明出来ない。別稿［蔀 1998-1］において示したように、南アラビア碑文には1世紀になってようやく、アラブ人を指す *'rb* や、ベドウィンを指す *''rb* という語が現れ、その後その使用例は急増する。おそらくこの前後の時期より、北方（それが何処であるかが問題なのだが現段階では不明）からアラブ・ベドウィンが波状的に南下・侵入した結果ではないかと考えられる。南アラビア碑文にこの *'rb* /*''rb* という語と *frs* という語がほぼ同時期に出現するという事実に着目するならば、南アラビア諸国に普及した馬の少なくとも一部は、アラブ・ベドウィンによってもたらされたという推測も可能であろう。

但しここで問題なのは、本来ラクダ遊牧民であるアラブ・ベドウィンが、彼ら自身どのような契機で，また何時如何なるルートを通じて馬を導入するに至ったかが未解明なのである。半島内に残されている碑文や刻文、岩絵を見ても、この点の解明につながるものはないし、少なくともヘレニズム期までの北方史料の中では、彼らは常にラクダと結び付けられていて、馬の飼育や使役に言及した記事は皆無である。

Ⅱ. 4. 南東アラビアへの馬の導入

南東アラビアでは近年ムレイハの発掘調査によって、この問題に光を投げかけるいくつかの資料が得られた。

まず住民の墓地に隣接してラクダを葬った多くの墓を発掘したところ、そのうちの二つにラクダとともに馬が1頭ずつ埋葬され、しかもそのうちの1頭は金の装飾を施した馬具を伴っているのが発見された [Jasim 1999]。ムレイハ遺跡全体の年代は前3世紀末から後3世紀半ばに置かれているが、この墓地は墓の建造様式から見て前1世紀から後1世紀の間に年代付けられるという [*Ibidem*:92]。墓の位置から判断して、ラクダや馬は飼い主の埋葬に際して屠られ葬られたと見なせるので、年代は墓地のそれと同じである。ラクダに関して興味深いのは、中に3頭いわゆる「ヒトコブ半ラクダ」がいて、埋葬の状況から見て、他のヒトコブ・ラクダよりも貴重視されていたのが窺える点である [Uerpmann 1999]。中央アジア産のフタコブ・ラクダのオスとアラビア産のヒトコブ・ラクダのメスを交配してヒトコブ半ラクダを生む技術は、パルティア時代の前2世紀にティグリス・ユーフラテス両河の渓谷地帯に始まったと言われるが、それがムレイハの墓地に葬られているというのは、同所に葬られている馬の来歴を考えるうえ

でも極めて示唆的と言えるのではないか。

ムレイハからは他に馬の絵が彫られた銅（もしくは青銅）製の鉢の断片が2点出土した。その一方には、盾を持った歩兵に槍を振りかざして立ち向かう騎馬兵と、その後に続くラクダ騎兵が描かれている。ポッツによれば、発掘者のムトン M. Mouton はこれを前3世紀末か前2世紀初めに年代付けているという [Potts 1998-2:Fig.3]。この資料で注意すべきは、騎馬兵とラクダ騎兵の身なりが全く異なっている点である。後者が頭髪をターバンでくるみ、上半身は裸、腰には布を巻いているように見えるのに対し、前者は明らかに兜をかぶり身にはギリシア・ローマ風の丈の短い鎧をまとっている。この衣装の違いを見る限り、騎馬兵はギリシア人、ラクダ騎兵はアラブ人を表していると判断せざるをえない。ギリシア人騎馬兵の図像は、ムサンダム半島に遠征し、騎兵を率いてペルシア人と戦ったと伝えられるメセーネーの長官ヌメニウス［蔀 1998-2:25］を想起させる。年代的に見ても、セレウコス朝の影響力が湾岸で強かった時代の遺物であることは間違いない。ただこれはアラブ人自身の馬使役の資料とはなりえない。

もう1点の資料には獅子狩ををする2名の人物が描かれている [Robin 1994:Pl.42]。身なりは上記のラクダ騎兵とほぼ同様で、アラブ人を表していると見て間違いない。そのうちの1名の背後に描かれている馬は、残念ながら頭部しか残っていないが、面繋をつけているので野生馬ではなく、おそらく背には人を乗せていたのであろう。この遺物が出土した発掘区の年代は、前3世紀末から前2世紀末もしくは前1世紀にかけてということだが、ロバンはライオンの上部に点刻されている南アラビア文字の書体は前3世紀のそれと述べている [*Ibidem*:82]。同じ遺物の年代を考古学者のブレトンは前2/1世紀と述べているが、判断の根拠は示していない [Breton 1995:56]。

馬に関連したこの他の出土品としては、馬の上半身をかたどった青銅製で中空の、水か葡萄酒の容器の「注ぎ口(spout)」がある。これは類似品が、ペルシア湾岸からオマーンへかけての複数の遺跡から出土しているという [Potts 1990:269-270]。

以上の出土品から見て、南東アラビアへの馬の導入はおそらくメソポタミアかイラン方面から行われたのであろう。時期については南西アラビアよりは1世紀あるいはそれ以上早かったのではないかという印象を受ける。しかし紀元前後においても、まだそう多数使役されていたとは思えない。

アラビア半島北部においては、シリア方面においてもメソポタミア方面においても、アラブ・ベドウィンはしばしば定住民の軍と戦って、戦力としての馬の重要性は早くから認識していたのではなかろうか。ラクダの背にまたがったアラブ人がアッシリア騎馬兵に討伐される場面を描いたレリーフは、我々にも馴染みが深い。にもかかわらず、前一千年紀の末近くになるまで彼ら自身は馬を用いなかった、あるいは用いることが出来なかったのは何故か。視点を変えれば、ようやくこの時期に馬を導入するに至った契機は何であったのか。いずれもアラビアの古代史を理解する鍵となる重要な問題である。

Ⅲ. ササン朝支配期の政治情勢

226年に成立したササン朝は、対外的に極めて積極的な政策を展開したことで知られる。インド洋においてペルシア商人の活動が3世紀以降活発化するのも、その結果の顕著な一つの現れである。では、インド洋への出口に位置する南東アラビアに対して、その支配は如何なる形で及び、その後どのような形で展開したのか。

Ⅲ. 1. *Kashf al-Gumma* の伝承

アズド族の移住を伝えたオマーンの年代記 *Kashf al-Gumma*（18世紀前半の作）は、マーリクによって駆逐されたペルシア人は、彼の治世が終わるまではオマーンに戻らなかったと記した後、その後の情勢についてさらに次のように記している [Ross 1874:118]。

マーリクの後は彼の子孫が支配したが、やがてオマーンの支配権はアズド族の別の一族ジュランダー al-Julandâ b. al-Mustatir al-Ma'walî の手に帰し、一方ペルシアではササン朝が支配権を握った。因みにこの一族は、中央アラビア経由でオマーンに移住して支配権を獲得した。またジュランダーというのは、本来ササン朝からオマーンの支配者に与えられた称号であったが、やがてその一族をこの名で呼ぶようになった。上記の一族（Ma'walî Julandâ）の他に、ホルムズ海峡周辺の支配権を保持したマーリク系のアズド族の一派も、ジュランダー（Julandâ b. Karkar）と称した [Wilkinson 1973:44; 1975]。ササン朝とジュランダーの間には和平協定が結ばれ、前者はオマーンに4000人の兵士を駐屯させるとともに、アズド族の王の許に代官を置いた。また、ペルシア人が海岸地帯に居住したのに対して、アズド族は内陸部を治めた。ペルシアからは王の不興をかったり危険人物視された者が、兵士としてオマーンに送られてきたという。

これと同趣旨のさらに詳しい記事が、11世紀に著されたアウタビー al-'Awtabî 作『(アラブの) 系譜書 *Kitâb al-ansâb/ansâb al-'arab* 』に収められていて、おそらく *Kashf al-Gumma*の記事はこれに拠ったものであろう。アウタビーの書は一部（後述）を除いて未刊行で、筆者は目にしたことがない。複数の写本が伝存しているそうで、それらを研究したウィルキンソンによると、問題の協定は6世紀の後半にササン朝のホスロー1世とジュランダー一族との間に結ばれたと推察されるが、アウタビーはその頃の事情とササン朝の支配が初めてアラビアに及んだ3世紀のそれを混淆しているようである [Wilkinson 1973:41]。そこでまず、3世紀の事情から見ていくことにする。

Ⅲ. 2. アラビア半島湾岸部の征服・支配

ササン朝の創始者アルダシール1世の征服事業が、アラビア半島にはどの程度及んだかという点について、既に詳しい研究が2点ある[Piacentini 1985; Widengren 1971]。前者はこの問題に関する専論、後者はその一部でアラブ人との関わりに言及しているという違いはあるが、いずれも史料の原文まで挙げた好論である。それで、ここではその要点を記すに止める。

この問題に関する同時代の文献は極めて少なく、上記の論考で引かれているのも、殆どが後世の史書である。そういう場合の常として、諸史料の記事は必ずしも一致していない。アルダシール1世のアラビア遠征の場合は、史料の伝承は2系統に分かれる。タバリー al-Ṭabarî の『預言者と諸王の歴史』とイブン・アルアスィール Ibn al-Athîr の『完史』がバフレインへの遠征にしか言及していないのに対して、11世紀前半の作と見なされている著者不詳の *Nihâyat al-irab fî akhbâr al-Furs wa 'l-'Arab* はこの点非常に詳しく、軍勢を率いたアルダシールは、「オマーンとバフレインとヤマーマとハジャル」の間の地に遠征し、バフレインの王とオマーンの王を殺害したと記している。この史料によれば、この戦いに際してイエメンやティハーマからアラブ軍に援軍が送られたという。ディーナワリー al-Dînawarî の『長史』に見られる伝承も同系統であるが、記事はずっと簡略で、アルダシールはオマーンとバフレインとヤマーマに遠征してバフレインの王を殺害したと記すのみで、オマーン王の殺害やイエメン、ティハーマからの援軍には言及がない。

これらの伝承から、アルダシールがバフレイン（バフレイン島のみならず対岸一帯をも含む広義のバフレイン）を征服したことはほぼ認めてよいと思われるが、彼がさらにオマーン方面にまで遠征したという伝承は疑わしい。イエメンやティハーマからの援軍というのは、3世紀の前半にはまずありえないし、アラブの諸部族との抗争という点では、次の世紀のシャープール2世のそれの方が史料の裏付けもあるので、実際にはこの王によって行われた遠征が、王朝創始者の偉大さを美化するため、アルダシールに付会されたという解釈も可能である。

一般には、パルティアの時代にその勢力がオマーンの沿岸部に及んでいたことや、ヤークート Yâqût

の『地理学事典』に記されている、アルダシールがオマーンのシフルにアズド族を居住させて船乗りとした（但しイスラーム勃興の600年前に！）という伝承、それに次に挙げるアルダシールの息子で後継者のシャープール１世が遺した碑文などをもとに、アルダシールのオマーン遠征の結果か否かはともかくとして、ササン朝はその成立の当初より、オマーンを含む南東アラビアを少なくとも名目的には支配下に置いていたと考えられている。因みにシフル al-Shihr はワーディー・ハドラマウトの河口にある港市で、歴史的にはオマーンではなくハドラマウトの一部である。６世紀の後半にササン朝がイエメンまでを支配下に収めた時期ならそういうこともありえようが、アルダシール１世の時代に既にその勢力がシフルにまで及んでいたとは考えられない。

さてシャープール１世の碑文というのは、ナクシェ・ルスタム Naqsh-i Rustam の「ゾロアスターのカーバ」と呼ばれる建造物に遺された、ギリシア語・中世ペルシア語・パルティア語の３語併記の碑文である [Maricq 1958]。冒頭に列挙されているシャープールの支配地の最後、27番目に、パルティア語部分では「マズーン MZW[N]」という地名が読み取れる。ペルシア語部分にはこの地名はなく、ギリシア語部分の該当箇所は欠けていてよく読めない。マズーンはササン朝時代にオマーンを指すのに一般的に使われた語で、年代的にはこの碑文がその初出例である。ただパルティア語部分にこの地名が記されているのを見ると、既に前代からこの名で呼ばれていたのであろう。ここのマズーンが指す範囲や支配の実態といった具体的なことは何もわからないが、上にも記したように、南東アラビアの少なくとも海岸部には、ササン朝の影響力がかなり強く及んでいたのであろう。

Ⅲ. 3. マズーン

マズーンの語義について後世のアラビア語文献の中では、オマーンの首都（これをスハールに同定した記述を間々目にするが、確たる根拠なし。おおかた次に挙げるマズーンをスハールのペルシア語名とする説と結びついて生まれた説であろう）の名称、オマーンのペルシア語名、ユダヤ人の住むオマーンの都市（これもスハールに同定した記述を目にするが、根拠なし）の名称、スハールのペルシア語名等の様々な説明がなされているが [Lammens 1907:400]、上記のゾロアスターのカーバ碑文や、後述のネストリウス派の教区名といった同時代史料における用例から見て、南東アラビアがこの語で呼ばれていたのは確かだと思われる。ただ、その指す範囲が必ずしも明確ではない。

語源的にはアケメネス朝期の古ペルシア語碑文に現れるマカー Makâ 州の住民を指す「マチヤ Maçiya（単数形）／マチヤー Maçiyâ（複数形）」から転訛したという説が有力のようである [Potts 1985:88]。ただマカーの場合にはオマーンの対岸のイラン側まで含んでいたが、マズーンの場合には史料的に明確にイラン側まで指しているケースはないのではなかろうか。

因みにポッツ [*Ibidem*] は、ハムダーニー al-Hamdânî（10世紀のイエメンの学者）が『アラビア半島地誌 *Sifat Jazîrat al-'Arab*』の中で「マズーンはシフルとカティーフとハサーを含んでいた (included)」と記していると述べているが、これは事実に全く反する。彼の論考の文脈から見て、ポッツはこの書には直接当たらず、ラマンからの孫引きで済ましていると推察されるが、問題の箇所 [Lammens 1907:400] には「彼はそれをシフルとカティーフとアフサー al-Aḥsâ の間に配置している (il l'encadre entre)」と記されていて、ポッツの誤解は明白である。とは言え、ハムダーニーの書 [Müller 1968:215, ll.6-7] には、マズーンがこれら三つの地名の他にヤマーマやバフレインなどといった地名と並べて記されているだけである。マズーン以外は周知の地名なので、ラマンがマズーンの位置を上記のように解釈したまでで、ハムダーニー自身が「配置」した訳ではない。だがハムダーニーが、マズーンの位置をラマンが解釈したように捉えていたのは間違いない。それは広義のオマーンにほぼ一致する。

Ⅲ. 4. ペルシア人とアラブ人の関係

ササン朝期の南東アラビアにおけるペルシア人とアラブ人の関係に明確に言及した史料は、先に触れたアウタビーの『系譜書』の中の、ササン朝とジュランダーの間に結ばれた協定しかない。ただこの史料は、問題の協定について記した箇所を含む大部分が未刊行である。また、この協定について多少なりとも詳しく研究したのはウィルキンソンであるが [Wilkinson 1973:44-47]、彼は協定の内容には言及しても、その原文は勿論のこと、それの翻訳を正確に引用するということすら行っていない。

この協定は6世紀のホスロー1世の時代に結ばれたと推察されるが、その直前にペルシア人とアラブ人の間に抗争があったという伝承はない。しかし5世紀に（この年代に史料的根拠があるのか不明）新しく移住してきた Ma'walî Julandâ がオマーンの支配権を握るという大きな変動があり、それに伴ってペルシア人との関係も動揺したであろうから、そこにこのような協定を結んで両者の関係を安定化させる必要があったのであろうと、ウィルキンソンは推測している [*Ibidem*:44]。

海岸地帯におけるペルシア人の中心都市がスハールであったと一般に考えられているのは、この時代ここがオマーンの最重要港になっていたことの他に、後にムハンマドの派遣したオマーンの改宗を促す使節が、スハール近くのペルシア人が築いたダムセトジェルド Damsetjerd に到来したという伝承[Ross 1874:118] があることによる。この伝承にはまたアズド族が、改宗を拒んだペルシア人達を彼らの町であるダムセトジェルドに追い込んだとも記されている [*Ibidem*:119]。もっとも別の伝承によれば、ムハンマドの使節はスハールでジュランダーの二人の息子に会って預言者からの手紙を手渡したという［バラーズリー 1988:80］。また後述するように、ジャーヒリーヤ時代にスハールで開かれた年市において、ササン朝ではなくジュランダーが10分の1税を徴収していたという。このような点から見て、たとえスハールにおいてペルシア人の影響力が強かったとしても、ササン朝支配期の末近くともなれば、ジュランダーが実質的にここを支配していたのではなかろうか。

ペルシア王の代官はやや内陸に位置する現在のルスターク al-Rustâq に駐在し、ここがオマーンにおけるササン朝の軍事・行政の中心であったと推察されている[Wilkinson 1973:43; 1979:888]。その理由は、この地名が中世ペルシア語起源（Bosworth 1995 によれば "rural district, countryside"）であることや、市内に現在も残る城塞が「ホスローの砦 Qal'at al-Kisrâ」と呼ばれていることによる。

Ⅲ. 5. ラフム朝の支配の有無

イラクのヒーラを本拠地としていたアラブのラフム朝の支配が、オマーンにまで及んでいたか否かという議論がある。

この王朝の2代目の王イムルゥ・ル・カイス Imru' al-Qays の墓碑（ナマーラ碑文／西暦に換算して328年の年紀あり）に、彼がアスドの両族 al-Asdayn（読みは Beeston 1979:3-4; Shahîd 1979:36-37 に従う）を支配したと記されている。このアスドはアズドに等しいので、アスドの両族とは後に「サラートのアズド族 Azd al-Sarât」と「オマーンのアズド族 Azd 'Umân」と呼ばれるようになる二つのグループのことである。後者は中央アラビア経由でオマーンに移住し、5世紀にはそのうちの1氏族が支配権を握るに至ったグループであるが、4世紀初頭に彼らがどこにいたかは分かっていない。イムルゥ・ル・カイスにはこのグループの血が流れていた [*Ibidem*:37] ので、それが上記の主張の根拠となっているのであろう。彼の支配が湾岸のハジャル付近にまで及んだということならありうるが、オマーンまでがその勢力圏に入ったとは考えにくい。

ササン朝のヴァフラム5世が、ラフム朝のムンズィル1世をヒーラとヒジャーズの間に広がる地方の王にしたと、サアーリビー al-Tha'âlibî が書き記している[Zotenberg 1900:555]。この記事をもとに、430年頃よりラフム朝の王の支配がオマーンにまで及んだと推察する[Fiey 1969:215]のは、ポッツが批判する

ように[Potts 1990:334] 明らかに無理である。ヒーラとヒジャーズの間といえば、アラビア半島の中央部よりも北で、オマーンは遥かに東方に遠く離れている。

次の6世紀になると、既に幾度か言及したホスロー1世が、ラフム朝のムンズィル3世をオマーン、バフレイン、ターイフに至るまでのヤマーマ、それにヒジャーズの残りの地域の王にしたとタバリーが伝えている [Nöldeke 1879:238]。要するにガッサーン朝の支配下にあるシリアと、ヒムヤルが領有する半島南西部を除く、全アラビアの支配をムンズィルに委ねたということであろう。ホスローの即位は531年頃であったが、ムンズィルはそれに数年先立つ528年に、ヒムヤルの後援を受けてアラビア半島の中部から北部へかけて勢威を振るっていた義父のハーリス al-Ḥârith を殺害し、彼の支配するキンダ王国を覆したばかりであった。おそらくホスローは、このようなムンズィルの勢力伸張を追認しただけでなく、ガッサーンやヒムヤルとの戦いを積極的に援助したと思われる。因みにムンズィルの支配下にあるアラブ部族とヒムヤルの遠征軍が半島中央部で戦いを繰り返している様子は、現地に遺されている磨崖刻文からも窺い知ることができる [蔀 1998-1:173]。しかしこのムンズィルの支配についても、果たして実際にオマーンにまで及んでいたかとなると、おおいに疑問である。キンダ王ハーリスにしてもこのムンズィルにしても、オマーンの名目的な支配を示唆する伝承はあっても、その支配を実現させるためには必要であったはずの遠征に触れた史料は全くない。

そして先に述べたように同じ世紀の後半になると、ホスローはジュランダーとの間に協定を結んで、オマーンの支配体制を整備するに至る。以上見たところから、ラフム朝の支配が実際にオマーンに及んだことはなかったと結論付けたい。

Ⅳ. キリスト教の伝播

ササン朝領内へのキリスト教の伝播やペルシア湾岸に建設されたネストリウス派教会について、文献史料を用いた研究は勿論行われているし [Chaumont 1988; Fiey 1969, 1993]、近年はサウジアラビアやアラブ首長国連邦から、教会や修道院の遺構や遺物の発見が報告されている [King 1997; Langfeldt 1994; Potts 1994]。しかし南東アラビアへの布教がどのような形で行われたのかということに触れた史料は、残念ながら未発見である。しかしその点にかすかに言及しているのではないかと言われる史料を、まず最初に検討しよう。

それは5世紀前半にフィロストルギオス Philostorgios によって著された『教会史』[Bidez 1913]である。その第3巻4～6章に、340年代の前半にローマ皇帝コンスタンティウス2世が、アリウス派キリスト教布教のためにテオフィロス・インドス Theophilos Indos を南アラビアとエチオピアに派遣したという記事がある。南アラビアのヒムヤル王国の支配者は改宗に同意して領内の3箇所に教会が建てられたが（第4章)、エチオピアのアクスム王国における宣教が思うようにいかなかったらしい（第6章）のは、既にそれより10年余り前にこの王国の支配者が、アタナシウス派のフルメンティウス Frumentius の教えを受け容れていたからであろう。

さてここで問題なのは、ヒムヤル王によって教会が建てられた場所である。『教会史』には首都のザファールと「ローマの商業地(emporion)」のアデン、それに3番目としてペルシア湾の湾口近くにある「ペルシアの商業地」が挙げられている。アデンが「ローマの商業地」と呼ばれるのは、ローマ領からやってくる人々は必ずここに上陸するからと説明されている。ザファールとアデンに教会が建設されたというのは、大いにありうることである。南西アラビアの碑文史料からも、4世紀の半ば頃に少なくとも王を中心とする支配者層が、伝統宗教から一神教（キリスト教か否かは不明）に改宗したことが窺える。ところが3番目の教会が建てられた場所が、よく分らない。「ペルシアの商業地」という呼称の由来は、

「ローマの商業地」と同様、ペルシア人がよく訪れる港市ということであろう。それよりもペルシア湾口近くという方が重要で、ここに着目する者はスハールやホルムズに同定している[Potts 1990:330-332]。もしスハール説が正しいということになれば、これが南東アラビアへのキリスト教伝来に関する最古の史料ということになる。

しかしスハールに教会のあったことを伝える史料は皆無であるし、発掘によっても、少なくとも今までのところ教会址は発見されていない。またヒムヤル王の支配が果たしてペルシア湾口近くにまで及んでいたか、という点が最大の疑問である。確かにアバダーン碑文によると、この前後の時期にヒムヤル王はヤマーマ地方やヤブリーンに軍事遠征を行っているので［蔀 1998-1:170-171］、その勢力が湾岸方面にまで及んでいたことは認められるが、オマーンとの関係を示唆する史料はない。教会建設地の名が明記されていないところから見て、フィロストルギオスのこの３番目の教会に関する情報はそれほど正確でなかったと推察されるので、「ペルシア湾口近くに」という記述を著者の誤解と判断して、第３の教会の建設地としてアデンの東のカネー／カナーあたりを適当と考える説もある[Doresse 1957:151]。この港は１世紀以降、特に乳香の取引地として栄えた所で、最近の発掘によって、４世紀にはエジプト方面よりもペルシア湾岸やメソポタミアとの取引が盛んであったことが明らかにされている[Sedov 1996:27]。その点では「ペルシアの商業地」と呼ばれてもおかしくない。スハールにまでヒムヤルの勢力が及んでいたとは信じ難い筆者には、この説の蓋然性の方が高くを感じられるのだが。

因みにテオフィロスが何故インドス（インド人）と呼ばれたかというと、幼時におそらく債務の担保として、インド人が住むディブース Dibûs島からローマ人の許に送られてきたためであったが、彼はヒムヤルでの活動を終えてアクスムに行く前に、生まれ故郷のディブース島に渡り、さらにそこからインドの他の諸地域に赴いてキリスト教信徒の間に見られた教義や儀礼の乱れを正したという（第５章）。ここの「インド」とディブース島の同定がやはり大きな問題で、既に別の機会にやや詳しく論じたので［蔀 1993:99-100］ここでは繰り返さないが、そこで推察したように、もしこの島がソコトラだとすると、カネーまで来たテオフィロスがついでに立ち寄るというのは自然である。

たとえ第３の教会がスハールに建てられたとしても、アリウス派に属するその教会が、その後オマーンにおけるキリスト教の布教に大した役割を果たしたとは考えられない。というのもペルシア湾岸の他の地域と同様、オマーンに広まったのはネストリウス派のキリスト教であったからである。

ベート・マズーナーイェー Bêth Mazûnâyê と呼ばれるオマーンの教区の存在が史料的に最初に確認できるのは、424年にダーディーショー Dâdîshô‘の主宰で開かれ、イラン教会のアンティオキアからの独立を宣言することになったマルカブタ Markabta のネストリウス派宗教会議 [Christensen 1936:276] である。その参加者の中にマズーン教区の主教ヨハンノン Yohannon の名が見えるという。さらに544年、576年、676年に、いずれもササン朝の首都セレウキア = クテシフォンで開かれた宗教会議に、マズーン教区から主教が列席したという記録がある[Fiey 1969:215-217; 1993:110; Potts 1985:90; 1990:333, 338, 347]。７世紀にイスラームが伝播した当時、オマーンにも相当数のキリスト教徒が存在したと考えられる。

V. 港市と年市

ササン朝支配期には前代に引き続いて、ローマ／ビザンツ領のエジプトからペルシア湾やオマーン湾の港に商船が来航するということがなかっただけでなく、パルミュラがローマに滅ぼされた後は、シリア方面からペルシア湾を通ってインドへ向かう商人も殆どなくなったであろうから、ギリシア・ラテンの古典語文献からは湾岸の港市に関する情報が姿を消した。この時期ペルシア商人がインド洋で大活躍

したことは、少ない史料からも間違いなく言えるのであるが[Gropp 1991; Whitehouse & Williamson 1973; Whitehouse 1996]、如何せんペルシア人自身は通商関連の文字史料を、刻文と文献とを問わず全く遺していない。また彼らの主な取引相手であったインドやスリランカの人々も、この点同様であった。僅かに後世のアラビア語文献を通じて、いくつかの港の名を知りうるにすぎない。

ジャーヒリーヤ時代のアラビア半島には、1年をかけて半島を時計の針と同じ方向に一巡する定期の年市のサークルがあった［家島 1988:10-12, 15-16; 1991:86-91; 医王 1996］。成立は5世紀末から6世紀初頭にかけてで、6世紀半ば以後に発展したと考えられている［家島 1991:86]。スークの開かれる時期は、半島各地で行われる巡礼行事と密接なつながりがあっただけでなく、インド洋や地中海に臨む港に交易船が入港する時期とも連関していた。

スークの開かれた場所と数は史料によって多少異なるが、オマーンではスハールとダバー Dabâ／ダッバー Dabbâ／ディバー Dibâ／ドウバー Dubâ（読みは研究者により異なる。スハールの北方，ムサンダム半島の先端近くに位置し、現在はオマーンとU.A.E.の国境線によって分断されているディバーであろう）の名が挙げられている。前者ではスークは第7月（ラジャブ）の初日から5日間開かれた。後者のスークは同じ月の終わりに開かれ、シンドやヒンドそれに中国からの商人や、東西の人々がやってきた。両スークともジュランダーによって10分の1税が徴収されていた［医王 1996:8］。

ジャーヒリーヤ時代の暦月はイスラム暦のそれと異なり、季節と密接な関連を有していたと思われる。また新年は春分か4月に始まったと推定されるので、第7月といえば10月頃に当たる。インド洋では北東のモンスーンが吹き始めた時分で、それに乗ってインドからの商船の第1陣がオマーン沿岸の港に来航する季節であった。スハール，ディバー，いずれのスークも巡礼とは無関係なので、開催の期日は専らインドから交易船が入港する時期に合わせて設定されたと推察される。スハールはワーディー・ルートで内陸のブライミ・オアシスと連絡し、そこから先は北へ進めばペルシア湾岸のジュルファールの港に出られたし、逆方向に進路をとれば内陸の諸都市が連なっていた。ディバーとジュルファールの間は峠越えの道を通じて極めて容易に往来できた。このジュルファールは、この時代の貿易港としては史料に言及がないが、次章で見るように別の文脈で史料の中に登場し、そこから南東アラビアのペルシア湾岸では最重要な港であったことが判明する。

VI. イスラーム征服期前後の状況

オマーンのイスラーム受容についてはあまり詳しい伝承はなく、バラーズリーの『諸国征服史』の翻訳を行った花田も「ムハンマドとこれらの地域（オマーン、バフレイン、ヤマーマ）・集団との関係はどうであったのか、その実態はよく解らない。バラーズリーが伝える話の内容はたぶんに後世の学者によって潤色されたきらいがある」と述べている［バラーズリー 1988:79］。ともあれバラーズリーの伝えるところでは、先にも記したようにヒジュラ暦8年にムハンマドによってオマーンに派遣された使者は、スハールでジュランダーの2人の息子アブドとジャイファルに会って、改宗を促す預言者からの手紙を手渡した。彼らは自ら改宗に応じただけでなく、当地域のアラブにも勧めて改宗させたという [*Ibidem* :79-80]。現地の別の伝承では、使者が訪れたのはスハール近くのダムセトジェルドであった。またこの伝承では、改宗を拒んでアズド族にダムセトジェルドに追い詰められたペルシア人達は、金銀を始めすべての財産を放棄するという条件で助命され、オマーンから去ったという [Ross 1874:118-119]。

このようにしてイスラームを受容したオマーンであったが、ムハンマドが世を去ると、当地のアズド族はメディナ政権に対して離反した。彼らはダッバー（上記の港市であろう）に退去して陣を布いたが、初代カリフのアブー・バクルが送った軍勢によって打破られ、再びメディナの支配下に置かれた［バラ

ーズリー 1988:81]。

先に引いたアウタビーの『系譜書』によると、その後ウマル（第２代カリフ）のもとに、ヤズデギルド（ササン朝最後の王）を支持するペルシア人達がスィーラーフの海岸やファールス地方に集結しつつあるという情報が届いた。そこでウマルは、バフレインとオマーンの総督に任じていたウスマーン・ブン・アビー・アルアース・アッサカフィー 'Uthmân b. Abî al-'Âs al-Thaqafî に手紙を送り、渡海して彼らを攻撃することを命じた。彼はまた上記のアブドとジャイファルにも、アズド族を率いてウスマーンを援助するようにと書き送った。ウスマーンはオマーンのアズド族を主体としバフレインあたりのアラブ諸部族も交えた軍勢をまとめると、ジュッラファール Jurrafâr（ジュルファール）から船出してバヌー・カーワーン Banû Kâwân 島（ホルムズ海峡のキシム島）に上陸した。同島を支配していたペルシア人は戦わずに降伏したが、ヤズデギルドの命を受けてキルマーンの軍勢がホルムズから来襲したので、アラブ・ムスリム軍はこれと戦って打破った [Hinds 1991:14-17, 87-88]。この戦いは639年か640年に行われたと考えられるが、アウタビーの伝承はキシム島における戦いと、その後ペルシア本土に渡って行われたより大規模な戦いを混同しているのではないかと言われる [Hinds 1984:42]。

遠征軍の乗船・出発地への言及はないが、ファールス，キルマーン両地方征服の先駆けとなるこの遠征については、バラーズリーもいくつかの伝承を引いている。それによると、ウスマーン自身が遠征軍を率いたという伝承の他に、弟のハカムが派遣されたという伝承もあったようである。またキシム島の名は、アバルカーワーン Abarkâwân という形で伝えられている［バラーズリー 1996:119-120, 131］。

その後、正統カリフ時代末の内乱期を経て、オマーンでは中央政権に叛旗を翻すハワーリジュ派の一派のイバード派が勢力を有したため、ウマイヤ，アッバースの両朝を通じてしばしば遠征軍が派遣された。その遠征軍とオマーン軍との戦いの記録の中で、ジュルファールへの言及が散見するという［King 1994:206-207］。文献史料によれば、ササン朝期からイスラーム期へかけて、前代のオマナに代わってジュルファールが、南東アラビアのペルシア湾岸の最重要港として利用されていたようである。

ムサンダム半島の先端近くに位置していてイラン側の港との往来が容易であること、既述のように東のオマーン湾岸のディバーとの間も簡単に往復できること、さらに南へ山麓のオアシスづたいにオマーンの中枢部に通じるルートのペルシア湾側の入口となっていたことなどが、ジュルファールのすぐれた立地条件であった。スハールやそれよりはやや劣るがディバーが、インドやその他のインド洋沿岸諸地域から来航する船の入る港であったのに対し、おそらくジュルファールは主としてイランやイラクの港と密接なつながりがあったのではないかと推察される。

ただ現地の人にジュルファールとして知られているマターフ al-Matâf の遺跡 [Hansman 1985] からは14世紀以降の遺物しか出土しないので、ここで問題にしているジュルファールは、名前は同じでも別な場所であったと考えられる。佐々木教授も数年来発掘を行っているハレイラ島 Jazîrat al-Hulayla を最有力候補と見なす説 [Kennet 1994] が優勢であったが、最近、ハレイラ島よりもマターフに近いだけでなく遺跡の規模も大きく、さらに年代的にマターフ遺跡と連続する（ハレイラ島からは12・13世紀のものが出土しないという）クシュ Kush 遺跡の方を、古代のジュルファールに同定する説が提唱されている [Kennet 1997]。

Ⅶ. おわりに

以上、前稿では主としてキリスト紀元前後から２世紀間の、本稿ではそれに続くササン朝支配期からイスラーム征服期にかけての南東アラビアに関連する記事を、文献史料の中に拾ってきた。前稿で対象とした時期については同時代史料と呼べるものが存在したのに対して、本稿で扱った時代にはその種の

史料が極端に少ない。後世のアラビア語史料にしても、上で見たように、この地域と海上交易との関わりに言及した記事は、ごく僅かしか残されていない。オマーンやU.A.E.で行われつつある考古学調査に強く期待する所以である。

略号表

AAE *Arabian Archaeology and Epigraphy*
BSOAS *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*
EI^2 *Encyclopaedia of Islam* (New Ed.), Leiden
GA K. Schippmann, A. Herling & J.-F. Salles (eds.), *Golf-Archälogie*, Buch am Erlbach, 1991
JOS *Journal of Oman Studies*
PSAS *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*
TA H.P. Ray & J.-F. Salles (eds.), *Tradition and Archaeology: Early Maritime Contacts in the Indian Ocean*, New Delhi, 1996

REFERENCES

Abu Ezzah, A.
1979 "The Political Situation in Eastern Arabia at the Advent of Islam", *PSAS*, 9, 53-64.

Beeston, A.F.L.
1979 "Namara and Faw", *BSOAS*, 42, 1-6.

Bidez, J.
1913 *Philostorgius Kirchengeschichte*, Leipzig.

Bosworth, C.E.
1995 "Rustâḳ, EI^2, Ⅷ, 636.

Boucharlat, R. & Mouton, M.
1998 "Les pratiques funéraires dans la péninsule d'Oman. Répartition et mode de construction des tombes de Mleiha(E.A.U.)", C.S. Phillips, D.T. Potts & S. Searight (eds.), *Arabia and its Neighbours*, [Turn hout], 15-32.

Breton, J.-F.
1995 "Les représentations humaines en Arabie pré-islamique", G. Beaugé & J.-F. Clément (eds.), *L'image dansle monde arabe*, Paris, 43-58.

Chaumont, M.-L.
1975 "États vassaux dans l'Empire des premiers Sassanides", *Acta Iranica*, 4, 89-156.
1988 *La christianisation de l'Empire iranien des origines aux grandes persécutions du Ⅳ^e siècle*, Louvain.

Christensen, A.
1936 *L'Iran sous les Sassanides*, Copenhagen.

Cornu, G.
1984 "Aperçu sur les toponymes de la rive arabe du Golfe chez les géographes arabes d'époque classique", R. Boucharlat & J.-F. Salles (eds.), *Arabie orientale, Mésopotamie et Iran méridional de l'Age du Fer au début de la période islamique*, Paris, 359-361.

Doresse, J.
1957 *L'empire du Prêtre-Jean*, Vol.1: *L'Éthiopie atique*, Paris.

Fiey, J.M.
1969 "Diocéses syriens orientaux du Golfe Persique", *Mémorial Mgr Gabriel Khouri-Sarkis (1898-1968)*, Louvain, 177-219.
1993 *Pour un Oriens Christianus novus: répertoire des diocèses Syriaques orientaux et occidentaux*, Beirut.

Gropp, G.
1991 "Christian maritime trade of Sasanian age in the Persian Gulf", GA, 83-88.

Hansman, J.
1985 *Julfâr, an Arabian Port. Its Settlement and Far Eastern Ceramic Trade from the 14th to the 18th Centuries*, London.

Hinds, M.
1984 "The first Arab conquests in Fârs", *Iran*, 22, 39-53.
1991 *An Early Islamic Family from Oman: Al-'Awtabî's Account of the Muhallabids*, Manchester.

Jasim, S.A.
1999 "The excavation of a camel cemetery at Mleiha, Sharjah, U.A.E.", *AAE*, 10, 69-101.

Kennet, D.
1994 "Jazîrat al Ḥulayla--early Julfâr", *Journal of the Royal Asiatic Society*, Series 3, 4, 163-212.
1997 "Kush: a Sasanian and Islamic-period archaeological tell in Ras al-Khaima (U.A.E.)", *AAE*, 8, 284-302.

Kervran, M.
1996 "Indian Ceramics in Southern Iran and Eastern Arabia: Repertory, Classification and Chronology", *TA*, 37-58.
1997 "Ṣuḥâr", *EI*^{2}, Ⅸ, 774-776.

Kervran, M. & Hiebert, F.
1991 "Sohar préislamique. Note stratigraphique", *GA*, 337-348.

King, G.R.D.
1994 "Appendix Ⅲ: Historical commentary", in Kennet 1994:206-208.
1997 "A Nestorian monastic settlement on the island of Ṣîr Banî Yâs, AbuDhabi: a preliminary report", *BSOAS*, 60, 221-235.

Lammens, H.
1907 "Maronites, Μ α σ ο ν ι τ α ι et Mazoun du 'Oman", *Mélanges de la Faculté Orientale, Université Saint-Joseph*, 2, 397-407.

Langfeldt, J.A.
1994 "Recently discovered early Christian monuments in Northeastern Arabia", *AAE*, 5, 32-60.

Maricq, A.
1958 "Res Gestae Divi Saporis", *Syria*, 35, 295-360.

Mouton, M.
1997 "Les tours funéraires d'Arabie, *nefesh* monumentales", *Syria*, 74, 81-98. Müller, D.H.
1968 *Al-Hamdânî's Geographie der arabischen Halbinsel*, repr., Leiden (1st ed. 1884-1891)
Nöldeke, Th.
1879 *Geschichte der Perser und Araber zur Zeit der Sasaniden. Aus der arabischen Chronik des Tabari*, Leyden.
Piacentini, V. F.
1985 "Ardashîr I Pâpakân and the Wars against the Arabs: Working Hypothesis on the Sasanian Hold of the Gulf", *PSAS*, 15, 57-77.
Potts, D.T.
1985 "From Qadê to Mazûn: Four Notes on Oman, c.700 BC to 700 AD", *JOS*, 8, 81-95.
1990 *The Arabian Gulf in Antiquity*, Vol.2: *From Alexander the Great to the Coming of Islam*, Oxford.
1994 "Nestorian Crosses from Jabal Berri", *AAE*, 5, 61-65.
1998-1 "Identities in the East Arabian Region", *Mediterranean Archaeology*, 11, 27-38.
1998-2 "Some issues in the study of the pre-Islamic weaponry of southeastern Arabia", *AAE*, 9, 182-208.
Robin, Ch.J.
1994 "Documents de l'Arabie antique, Ⅲ", *Raydân*, 6, 69-90 and 186 (Pl. 42).
Ross, E.C.
1874 "Annals of 'Omân from early times to the year 1728 A.D. From an Arabic MS by Sheykh Sirhân bin Sa'îd bin Sirhân bin Muhammad, of the Benû 'Alî tribe of 'Omân", translated and annotated, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 43, 111-196.
Sedov, A.V.
1996 "Qana' (Yemen) and the Indian Ocean: the archaeological evidence", *TA*, 11-35.
Shahîd, I.
1979 "Philological Observations on the Namâra Inscription", *Journal of Semitic Studies*, 24, 33-42.
Teixidor, J.
1992 "Une inscription araméenne provenant de l'Émirat de Sharjah (Émirats Arabes Unis)", *Comptes Rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 695-707.
Uerpmann, H.-P.
1999 "Camel and horse skeltons from protohistoric graves at Mleiha in the Emirate of Sharjah (U.A.E.)", *AAE*, 10, 102-118.
Whitehouse, D.
1996 "Sasanian Maritime Activity", J. Reade (ed.), *The Indian Ocean in Antiquity*, London, 339-349.
Whitehouse, D. & Williamson, A.
1973 "Sasanian Maritime Trade", *Iran*, 11, 29-49.
Widengren, G.
1971 "The Establishment of the Sasanian Dynasty in the Light of New Evidence", *Atti del Convegno Internazionale sul tema: La Persia nel Medioevo (Roma, 31 marzo-5 aprile 1970)*, Roma, 711-784.
Wilkinson, J.C.
1964 "A Sketch of the Historical Geography of the Trucial Oman down to the Beginning of the Sixteenth Century",*Geographical Journal*, 130, 337-349.
1972 "The Origins of the Omani State", D. Hopwood (ed.), *The Arabian Peninsula: Society and Politics*, London, 67-88.
1973 "Arab-Persian Land Relationships in Late Sasânid Oman", *PSAS*, 3, 40-51.
1975 "The Julanda of Oman", *JOS*, 1, 97-108.
1977 *Water and Tribal Settlement in South-East Arabia. A Study of the Aflâj of Oman*, Oxford.
1979 "Ṣuḥâr (Sohar) in the Early Islamic Period: The Written Evidence", *South Asian Archaeology* 1977, Naples, 887-907.
1983 "The Origins of Aflâj of Oman", *JOS*, 6, 177-194.
1987 *The Imamate tradition of Oman*, Cambridge.
Yule, P.
1993 "Excavations at Samad al Shân 1987-1991, Summary", *PSAS*, 23, 141-153.
Yule, P. & Kervran, M.
1993 "More than Samad in Oman: Iron Age pottery from Ṣuḥâr and Khor Rorî, *AAE*, 4, 69-106.
Zotenberg, H.
1900 *Histoire des rois des Perses par Aboû Mansoûr 'Abd al-Malik Ibn Mohammad Ibn Ismâ'îl al-Tha'âlibî*, Paris.
医王秀行
1996 「ジャーヒリーヤ時代の偶像神と巡礼行事」,『東京女学館短期大学紀要』18, 1-19.
蔀勇造
1993 「ソコトラ島のキリスト教について」,『東洋史研究』51-4, 97-122.
1997 「新訳『エリュトラー海案内記』」,『東洋文化研究所紀要』132, 1-30.
1998-1 「碑文史料から見た古代南アラビア諸王国とアラブ・ベドウィンの関係」,『東洋史研究』56-4, 139-183.
1998-2 「文献史料に見る南東アラビア(1) ササン朝支配期以前」,『金沢大学考古学紀要』24, 20-38.
ハラーズリー (花田宇秋訳)
1988 「諸国征服史 5」,『明治学院論叢』431, 79-119.
1996 「諸国征服史 19」,『明治学院論叢』584, 87-172.
家島彦一
1988 「市場 (sûq/bâzâr) 研究の展望と方法論的提言」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「イスラム圏における異文化接触のメカニズム」プロジェクト班編『イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——』1, 1-19.
1991 『イスラム世界の成立と国際商業——国際商業ネットワークの変動を中心に——』, 岩波書店